

かけひきは、恋のはじまり

2008(平成20)年9月11日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★



監督=ジョージ・クルーニー/出演=ジョージ・クルーニー/レニー・ゼルウィガー/ジョン・クラシンスキー/ジョナサン・プライス(東宝東和配給/2008年アメリカ映画/113分)

第2章

新旧半々のラインナップ

…… 1925年のアメリカ。アメフト黎明期における実在のスターを主人公とした、恋の駆け引きはスリル満点！ もっとも、三つ巴の恋の争いのターゲットは、特ダネ狙いの女性記者だからやけどの危険性も大……。さて、ラストに訪れるアメフトの勝者は誰？ そして恋の勝者は誰？

ジョージ・クルーニー初の監督兼主演作だが……

ジョージ・クルーニーは多才で、俳優の他監督業や脚本業はもちろん、製作会社まで設立して幅広い映画活動を展開している。『グッドナイト&グッドラック』(05年)はアカデミー賞監督賞と脚本賞にノミネートされた名作(『シネマルーム11』175頁参照)だし、『フィクサー』(07年)はアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた名作(『シネマルーム19』238頁参照)。また、彼はスティーヴン・ソダーバーグ監督と仲がいいようで、『オーシャンズ11』(01年)、『オーシャンズ12』(04年)、『オーシャンズ13』(07年)の常連だが、『オーシャンズ』シリーズはあくまで娯楽を追求しただけの作品。彼にはやはり『グッドナイト&グッドラック』や『フィクサー』のような問題提起作がよく似合う……。

プレスシートによると、今回の『かけひきは、恋のはじまり』は彼が15年間構想を温めてきた企画らしい。これは1920年代のアメリカン・フットボールの黎明期における、中年の星ドッジ・コネリー(ジョージ・クルーニー)と学生からプロに転向してきたスター選手カーター・ラザフォード(ジョン・クラシンスキー)に焦点をあてた物語だが、ジョージ・クルーニーがはじめて監督と主演を兼ねたことが大きな話題に。

しかし、ちょっと待てよ。ジョージ・クルーニーって何歳……？ 彼は1961年生まれだから今47歳。いくら中年の星のプロプレイヤーといっても、47歳というお年ではアメフトの中心選手として走り回るのは少し無理があるのでは……？ そんな風に私は少し心配したが……。

日本ではアメフトはちょっと……

私が監査役を務めている株式会社オービックがスポンサーとなっているアメフトのクラブチームがオービックシーガルズ。このチームは、2005年に社会人選手権とライスボウルの両方で優勝した。それを受けて翌2006年12月に私はオービックシーガルズ vs. オンワードスカイラクスの準決勝の試合を観戦したが、残念ながら敗退。もっとも私はアメフトのルール自体がよくわからないので、観ていてもあまり面白いものではなかった。

私が思うに、日本ではプロ野球やサッカーは大人気だがアメフトはイマイチで、そこがアメリカとは大違い。ジョージ・クルーニーが1925年当時のアメリカン・フットボールと伝説の選手をテーマとして映画をつくるについては当然事前リサーチをしたはずだが、日本でもこんなテーマの映画がヒットすると読んだのだろうか……？ もしこの映画が日本でコケたら、それはテーマの選び方と市場リサーチのミスでは……？

原題は？ レザーヘッドとは？

この映画の邦題はいかにもロマンティックコメディ風だから、ジョージ・クルーニーとレニー・ゼルウィガーの共演といってもあまりピンとこない。だって、『ブリジット・ジョーンズの日記』(01年)や『ブリジット・ジョーンズの日記 きれいなわたしの12か月』(04年)で弾けた女の子(?)役を熱演したレニー・ゼルウィガーはまだオーケーだが、いくら何でもジョージ・クルーニーのロマンティックコメディはちょっと老けすぎ……？ そう思って原題を見ると、原題は『Leatherheads』。しかして、レザーヘッドとは一体ナニ……？ これはアメフトの試合で被る革製のヘッドギアのこと。

今ではアメフトといえば、頑丈なフェースガードつきのヘルメットやショルダーなどをすぐに連想するはず。つまり、アメフトはこんな頑丈な防具で身を固めた屈強な

体格の男たちが肉弾相打つ激しいスポーツなのだ。ところが、この映画が描く1925年当時のアメフトの防具は意外と軽装で、頭は耳まですっぽり覆う革製のヘッドギアを被っているだけ。これがレザーヘッドだが、この程度の防具でぶつかり合えば、けがが人続出となるのではと心配したが……？

キーウーマンはレニー・ゼルウィガー

この映画をドッジとカーターという2人の旧新選手に焦点をあてた単純なアメフト黎明期物語とせず、あるスキャンダル騒動を物語の中心とし、かつスリリングな三つ巴の恋愛模様を楽しむテイストにするについては、レニー・ゼルウィガーの役割が大。

彼女が演じるのは当時としては珍しい女性スポーツ記者レクシー・リトルトンだが、どうもそれは自ら望んだ職場ではなかったよう。にもかかわらず、レクシーがその仕事を引き受けドッジとカーターへの密着取材を敢行したのは、カーターの暴露記事を書くためのネタ探しのため。すなわち、カーターは第1次世界大戦のヨーロッパ戦線において、たった1人でドイツ軍の小隊を降伏させた“戦争の英雄”と称されているのだが、タレ込みの投書によると、どうもそれはインチキらしい。

レクシーはそのインチキを暴露できるネタを獲得すれば昇進させてやるというエサにつられて、カーターの取材を引き受けたようだが……。

年齢差はそのまま人生経験の差？

主役3人の実年齢は、ジョージ・クルーニーが1961年生まれ、レニー・ゼルウィガーが1969年生まれ、ジョン・クラシンスキーが1979年生まれ。しかして、映画の設定では、ドッジは年齢不詳ながらギリギリ40歳くらい？ そしてレクシーは自称31歳で、カーターは22、3歳……？

プレスシートによれば、ドッジは1920年に始まったプロ・フットボールの世界で「事実は小説より奇なり」を地で行く印象的なスター選手ジョン・マクナリーがモデルらしい。しかし、映画の設定では、ドッジは引退直前ながら反則を含めた戦術の立て方がうまいうえ、大学生の花形スターのカーターを自分のチーム「ダルス・ブルドッグス」にスカウトすることによって一挙にプロ・フットボール人気を集めるという経営戦略にも長けていたようだ。自信満々のカーターは、そんなドッジの手の平の上で機嫌よく頑張っていたから、これでみんな万々歳。



© 2008 Universal Studios. All Rights Reserved.

そのはずだったが、密着取材を続けるレクシーに好意を寄せたカーターが、ある夜ある秘密を告白してしまったから大変。レクシーは意識的にハニートラップを仕掛けたわけではないが、結果的にそれに近い形で特ダネを獲得しただけに、その発表には迷ったが、結果的に特ダネは翌日の新聞トップに載ることに。「戦争の英雄」兼アメフトの花形選手として絶大な人気を得ていたカーターのそんな秘密が明らかになれば、カーターはもちろんプロ・フットボール界全体の一大スキャンダル。

近時大問題となった相撲界の大麻問題は、露鵬と白露山の解雇処分そして北の湖理事長の辞任によって一応のケリをみたが、さてカーターのスキャンダルは……？ こちらを見ていると、年齢差はそのまま人生経験の差となっていることが明らか……。

恋の駆け引き模様は？

恋の駆け引きの基本は「押さば引け。引けば押せ」だが、それを実践しているのがベテラン選手のドッジ……？ 他方、全くトンチンカンな動きに終始しているのが年若いカーター……？ 他方、レクシーは当時としては珍しく仕事に意欲を燃やすキャ

リアウーマンだが、“アラサー”として微妙な気持の揺れがあるのは、80年前のアメリカ女性も同じ……？

もともと、彼女の密着取材の目的が目的だけに、レクシーが取材の狙いをカーターに定めたのは当然。したがって、レクシーといい仲になるについてはカーターが圧倒的に有利で、ドッジには本来勝ち目はないはず。そして、物語前半はそんな予想どおりのストーリー展開に。しかし、「あの秘密」が新聞記事として暴露されてしまった後、レクシーとカーターの関係が最悪になったのは当然。さあ、そうなる恋の駆け引きにおいては、「水に落ちた犬は叩け」の鉄則どおり落ち目のカーターを徹底的に叩いて自分を有利な立場に持ち込むのがセオリーだが、そこでドッジがとった駆け引きは……？

ここらあたりの、大人の恋の駆け引きをじっくりと……。

良くも悪くもトップの姿勢次第

日本相撲協会は北の湖理事長の辞任後、厳しい指導で知られる武蔵川親方が新理事長に就任したが、協会の具体的な組織改革はこれからの課題。そのうえ、露鵬と白露山は塩谷安男弁護士を代理人として解雇処分の無効確認と地位保全の仮処分を提起するそうだから、協会としてもそれなりに大変。たしかに、弁護士としての私の目から見れば、2人をクロと判定するのは少し根拠不足。また、解雇処分が重すぎるという主張にも一理ある。したがって、世論や雰囲気だけで判決を下すのではない法の世界では、この裁判は露鵬と白露山側にも勝ち目あり、と私は見ているが……。

それはともかく、カーターのスキャンダルが公になったところで、新コミッショナーは武蔵川新理事長以上（？）に徹底した事情聴取と厳正な処分を下す姿勢を示したからその行方が面白い。現時点ではレクシーの取材は根も葉もなかったという、カーターのやり手のエージェントであるC.C.フレイジャー（ジョナサン・プライス）の主張が圧倒的に有利で、レクシーは孤立状況。そんな中で新コミッショナーは、カーターとC.C.フレイジャーそしてレクシーと彼女の勤める新聞社の社長の4人を呼び出し、直接事情聴取しながら対処法を指示したが、そこに突然飛び込んできたのがドッジ。そこでドッジが主張したのは、何とヨーロッパ戦線でカーターの行動を直接見ていたという当時の戦友たちを連れてきたというものだ。それを聞いてカーターはあっさり自分の非を認めてしまったが、さてそこにはドッジのどんな策略が……？ そ

して「自白」後のカーターの処遇は……？

大相撲の世界において武蔵川新理事長の下に現在展開されている日本相撲協会のさまざまな方策と比べながら、この映画におけるコミッショナーの処置ぶりをみれば、きっと面白いはず……？

アメフトの勝者は？ 恋の勝者は？

この映画は1925年当時のアメフトの紹介と恋の駆け引きの二兎を追うもの（？）だから、エンディングではその両者について何らかの決着が着いているはず……？

そこでまず、アメフトの勝者は誰かということだが、それを語るについては、あんなスキャンダルを起こしたカーターが露鵬や白露山と違ってプロのアメフトの世界に生き残ったことが大前提。たしかにカーターは今、ダルス・ブルドッグスからシカゴのチームに移籍し、大きな期待を担っていたが、それはナゼ……？ そして、カーターを中心とするシカゴのチームと、相変わらずロートル選手のドッジを柱とする「ダルス・ブルドッグス」との闘いの決着は？

他方、一時は絶好調だったレクシーとカーターとの恋模様も、アメフトでのカーターの復活と同じように復活するの……？ それとも、ドッジがベテランの味を發揮してレクシーを口説き落とすの？ この映画のクライマックス（？）に向けての興味は、アメフトの勝者は？ 恋の駆け引きの勝者は？ の2点だから、それはあなたの目でしっかりと。

2008(平成20)年9月16日記